

# 『宇治拾遺物語』 橘以長説話再考

高 野 慎 太 郎

## 一 はじめに

『宇治拾遺物語』（以下『宇治拾遺』）に収められている一九七話には、他に同文話が確認されていない話が五四話あるとされ、その割合を考えると、『宇治拾遺』固有の説話について考察することは、『宇治拾遺』がいかなる説話集であるかを解明する上で重要であると考ええる。本稿において論じようとする橘以長も『宇治拾遺』固有の説話である第七二話と第九九話に登場する人物であるが、諸注釈書は『尊卑分脈』によった説明にとどまっております、『平安時代史事典』<sup>(2)</sup>にも、

大江匡房の養子の広房の子。大膳亮にして五位藏人。筑後守。嘉応元年に卒去。礼節を重んじた老練な侍であったことが『宇治拾遺』に見える。

とあるだけで、その人物像についてはあまり把握されていない。また、稿者の興味もとりのわけ説話を彩る人物たちにあるが、特に『宇治拾遺』

における摂関家周辺のいわゆる家司階級の人々は、編者や語りの〈場〉を考へる上で重要な役割を担っているとされる。<sup>(3)</sup>

そこで本稿では、橘以長が登場する『宇治拾遺』第七二話、第九九話を改めて検討するとともに、解釈の手立てとするために、古記録等に見られる以長に関する叙述を年譜形式でまとめることで、以長という人物の把握から『宇治拾遺』で以長の存在がどのように機能しているのかを考察したい。また、橘氏の長者であった以長と両話のもう一人の登場人物である藤原頼長との関係を見ていくことで、院政期における橘氏の有り様についても言及していきたい。

## 二 『宇治拾遺』第七二話について

まず、『宇治拾遺』第七二話を以下に掲げる。<sup>(4)</sup>

これも今は昔、大膳亮大夫橘以長といふ藏人の五位ありけり。宇治左大臣殿より召しありけるに、「今明日はかたき物忌を仕る事候ふ」と申したりければ、「こはいかに。世にある物の、物忌といふ

ことやはある。たしかに参れ」と召しきびしかりければ、恐れながら参りにけり。

さる程に、十日ばかりありて、左大臣殿に、世に知らぬかたき御物忌いできにけり。御門のはざまに、かいだてなどして、仁王講おこなはる、僧も、高陽院のかたの土戸より、童子などもいれずして、僧ばかりぞ参りける。御物忌ありと、この以長聞きて、いそぎ参りて土戸より参らんとするに、舎人二人ゐて、「人な入れぞ」と候ふ」とて、立ちむかいたりければ、「やうれ、おれらよ。召されて参るぞ」といひければ、これらもさすがに職事にて、つねに見れば、力及ばで、入れつ。

参りて、藏人所に居て、なにともなく声だかに、物いひゐたりけるを、左府聞かせ給ひて、「この物いふは、たれぞ」と問はせ給ひければ、盛兼、申すやう、「以長に候ふ」と申しければ、「いかに、かばかりかたき物忌には、夜部より参りこもりたるかと尋ねよ」と仰せければ、行きて、仰せの旨いふに、藏人所は御前より近かりけるに、「くわ、く」と大声して、憚からず申すやう、「過ぎ候ひぬる比、わたくしに物忌仕りて候ひしに、召され候ひき。物忌のよしを申し候ひしを、物忌といふ事やはある。たしかに参るべき由、仰せ候ひしかば、参り候ひにき。されば物忌といふ事は候はぬと知りて候ふ也」と申しければ、聞かせ給ひて、うちうなづきて、物もおほせられで、やみにけりとぞ。

この話は、以長が宇治左大臣藤原頼長の召し出しに対して、物忌によつて出仕できない旨を申し上げたが、それでも厳しく召し出されたので、恐る恐る参上することになる。しかし、今度は頼長に重い物忌が持

ち上がり、頼長は自邸における人の出入りも極力控えさせるのだが、これを知った以長は土戸で止める舎人を振り切つてまで頼長邸に入る。そして、自らが物忌のときに強引に召し出した頼長の言動と行動の矛盾を指摘し、頼長はそれに物も言えずに終わってしまったという話である。以長は「職事」として頼長に仕える身でありながら、主人たる頼長に対し、その矛盾を遠慮なく指摘し、頼長もそれにやりこめられてしまうところに本話の面白さがあると言える。

ちなみに、本話に登場する「盛兼」は、頼長に親しく仕える人物であることが窺えるが、その詳細は物語の中で語られることはない。それがかえつて『宇治拾遺』の語り手や語りの〈場〉に近い人物であることを感じさせるのであるが、諸注にも具体的な言及はなく、「伝未詳」とされている。この盛兼について伊東玉美は、

天養元年(一一四四)三月三日、頼長が忠実に、中原師元を介して節供についての教えを乞い、それを宇治から京へ連絡する際の使者として『中外抄』上六五条に名が見える「盛兼」と同一人物と見てよいものと思われる。

と述べ、忠実、頼長周辺に仕えた人物と推測している。<sup>(5)</sup> 稿者も当然、忠実や頼長の周辺にいる人物であると考えるが、新日本古典文学大系『中外抄』の当該話の脚注には、「底本は「成憲」で諸本「成兼」、「盛兼」等とあるが、「盛憲」が正しいか」としており、『中外抄』諸本には異同があるようだ。そうであるならば、『中外抄』の「盛兼」を『宇治拾遺』の「盛兼」と同一視することには一考を要する。『中外抄』の脚注が指摘する「盛憲」は、頼長の日記である『台記』にも多くその名が見られ、

頼長に家司として親しく仕えた藤原盛憲のことで、『保元物語』<sup>(6)</sup>にも、

盛憲・経憲は、左府の外戚なれば、事の趣をも存知し、近衛院・美福門院を呪詛し奉り、後徳大寺を焼きたりし事をも知りたるらん

とあって、保元の乱の後、頼長に連座して、佐渡に流された人物として知られる。たしかに、頼長との関係性からすれば、この「盛憲」が、『宇治拾遺』の「盛兼」であつても不自然なことはなく、むしろ頼長の物忌中であつても近侍する者としてふさわしい人物であるとも言えよう。しかし、管見によれば、『台記別記』仁平元年（一一五一）六月二十六日条、仁平三年（一一五三）八月八日条にそれぞれある春日詣の雑事定の記録には、「盛憲」「盛兼」「以長」三者の名が確認できる。つまり、「盛憲」とは別に「盛兼」という人物も頼長に仕えていたということであり、『宇治拾遺』の「盛兼」は人物像こそ把握できないものの、以長と同時期に頼長に仕えた家司であると推察される。

さて、本話において物忌にもかかわらず、頼長に召し出された以長であるが、この物忌を破るということについて考えておきたい。同じく『宇治拾遺』第二二話には、天徳二年（九五八）に没したとされる算博士の小槻茂助が物忌の最中に呪い殺されたという話がある。茂助は才覚優れていたが、その茂助を敵視する者が、陰陽師を伴って物忌のために固く閉ざされた茂助の家を訪れ、嘘によって茂助に遣戸から顔を出させた。その声を聞き、顔を見た陰陽師ができる限りの呪いをかけたことで、茂助は三日経って死んでしまったというのである。その話末評語には、

物忌には声高く、よその人にはあふまじきなり。かやうにまじわざする人のためには、それにつけて、かゝるわざをすれば、いとおそろしき事也。

とあり、ここからは、物忌中の外出や人との面会は避けるべきこととして捉えられていたと理解できよう。また、物忌を破ることは、『江談抄』に見える藤原行成の逸話<sup>(7)</sup>にあるように怨霊に憑依される、すなわち自己への他者の侵入を許してしまうことにもなり、物忌はそのようなことを恐れ、防ごうとする心性の具象であると捉えられる。これに関連して伊東玉美は、本話について次のような解釈を提示している。

王朝の人々にとって、邸宅は外界と閉ざされた空間で、そこに嚴重に籠もれば物の怪さえ侵入することはできない。邸は主人と不可分な存在であり、邸宅は主人そのものの、主人の力を象徴したのである。（中略）七二話では、意外なことにその侵犯者は警戒していた外部からの物の怪ではなく、しかじかの事情で物の怪などものともしななくなった身内の以長であったというわけである。

伊東は本話を「邸宅譚」として読み、邸宅が主人の力の象徴であるという解釈を提示している<sup>(8)</sup>。稿者もその解釈には、首肯するところであるが、その力の象徴たる邸宅を突破した以長の存在は、単なる物理的な侵犯者というだけではなく、象徴的な意味において結界を超越しうる存在として認めることができ、宮廷社会における秩序や権力を〈転倒〉あるいは〈無力化〉するものとして機能していると言えよう。そうであるからこそ、第七二話における頼長は「物もおほせられで、やみにけり」という

結末に終わってしまうのである。また、この〈転倒〉や〈無力化〉にまつわる面白さが、撰関期から院政期にかけて〈語り〉<sup>9)</sup>の対象を下級官人や庶人へと拡大させ、歴史物語や説話集を多く誕生させることへとつながったとも考えられる。

さらには、以長の行動を呼ばれもしないのにやってくる「推参」という視点で解する見方もある。<sup>10)</sup>「推参」については阿部泰郎が、

「推参」は、芸能を触発し、それによって生み出される興——因果論ではなく互いに循環する運動としての——そういう芸能の本質と深くかかわった人間のありかたと言ってもよい。その興がもたらす転倒や転換は、世の制限や規範を逸脱し乗り越えさせてしまう。

と論じているが、これに本話を重ねると、「くわ、く」と大声して、憚らず申<sup>11)</sup>している以長を、「声わぎ」の芸能者として捉えることも可能にし、見えざる力によって閉ざされた頼長邸は、この以長の推参によって、芸能の場へと昇華されていく様相を読み取ることもできるであろう。

### 三 『宇治拾遺』第九九話について

次に、『宇治拾遺』に以長が登場するもう一話、第九九話について考えてみたい。第九九話は以下の通りである。

これも今は昔、橘大膳亮大夫以長といふ藏人の五位有りけり。法勝寺千僧供養に鳥羽院御幸有りけるに、宇治左大臣参り給ひけり。

さきに、公卿の車行きけり。しりより、左府参り給ひければ、車を押さへて有りければ、御前の隨身、下りて通りけり。それに、この以長一人下りざりけり。いかなる事にかと見る程に、通らせ給ひぬ。さて帰らせ給ひて、「いかなる事ぞ。公卿あひて、礼節して車を押さへたれば、御前の隨身みな下りたるに、未練の物こそあらめ、以長、下りざりつるは」と仰せらる。以長申すやう、「こはいかなる仰せにか候ふらん。礼節と申し候ふは、前にまかる人、しりより御出なり候はば、車を遣り返して、御車にむかへて、牛をかきはづして、榻にくび木を置きて、通し参らするをこそ礼節とは申し候ふに、さきに行く人、車を押さへて候ふとも、しりをむけ参らせて通し参らするは、礼節にては候はで、無礼をいたすに候ふとこそ見えつれば、さらん人には、なんでう下り候はむずろと思ひて、下り候はざりつるに候ふ。あやまりてさも候はば、打寄せて、一言葉申さるやと思ひ候ひつれども、以長、年老ひ候ひにたれば、押さへて候ひつるに候ふ」と申しければ、左大臣殿、「いさ、この事、いかゝあるべからん」とて、あの御方に、「かゝる事こそ候へ。いかに候はんずる事ぞ」と申させ給ひければ、「以長、古侍に候ひけり」とぞ仰せ事ありける。

昔は、かきはづして、榻をば、轅の中に下りんずるやうにをきけり。これぞ、礼節にてはあんなるとぞ。

本話は、法勝寺千僧供養に参上の道途、ある公卿が、後方から頼長の車が来たことに気づき、車を止めた。すると、頼長の隨身たちは馬を下り、公卿の車の前を通り過ぎようとするのだが、以長だけは馬を下りなかった。周囲の人々が不思議な目で以長を見るが、その後、頼長が以長

にその事情を尋ねると、以長は公卿側の礼節を欠いた行動を指摘し、そのような礼節を知らないものに礼を尽くすことの不必要を頼長に説いた。頼長はこの以長の行動について「あの御方」に伺いをたてるが、「あの御方」は「古侍」と以長を評したものである。以長が主張する礼節については野本東生が詳細に考察している<sup>(12)</sup>ので、ここでは改めて言及することはしない。しかし、「あの御方」の発言にある「古侍」という表現を諸注が「老練な侍」という賞賛を含む表現として解釈していることに對し、野本は以長の主張する路頭礼は時代錯誤であるとして、

以長が「古侍」として称揚されるとは考えにくいのだ。ここは以長の行為に、困惑の嘆息を漏らしているのである。

と指摘している。「あの御方」は頼長の父忠実であるとされるが、その忠実の言談録『富家語』<sup>(14)</sup>一一八には、『宇治拾遺』第九九話にも通じる次のような話がある。

仰云、獄門近衛面ヲハ不通。西洞院面ハ令通給也。但指大殿仰ソトハ雖不聞食、本自不令通習給也。殿下通給之由、以長不審を申云々。

(仰せて云はく、「獄門の近衛面をば通らず。西洞院面は通らしめ給ふなり。但し、させる大殿の仰せぞとは聞こしめさずといへども、もとより通らしめず習ひ給へるなり」と。(殿下通り給へる由、以長不審を申すと云々。))

これは永暦元年(一一六〇)の言談であるが、基実が通らない習いである左獄の近衛大路側を通ったことに對して以長が疑問を呈したというのである。『宇治拾遺』第九九話同様、以長の故実へのこだわり、相手

が誰であれ堂々と指摘する人物像が読み取れる言談であるが、それは主人の側から見れば、野本が指摘するとおり、困惑するものであったかもしれない。しかし、『宇治拾遺』の語り手は、以長を批判的に捉えているわけではない。むしろ、以長の煩わしいとも言える性格によって主人を困惑させたことに話の中心を置いているかのようである。そういった意味においては第九九話も第七二話と同じように權威の〈転倒〉と〈無力化〉を指向する話として捉えることができるのではないか。

#### 四 以長と頼長との関係

ここまで、『宇治拾遺』第七二話と第九九話における以長について、權威を〈転倒〉〈無力化〉する存在として読み解いてきたが、それは一方で『宇治拾遺』独自の頼長像を語ることもつながっている。頼長についてある程度の紙幅を割いて叙述しているものに『今鏡』<sup>(16)</sup>ふじなみ中「かざりたち」があるが、そこには、

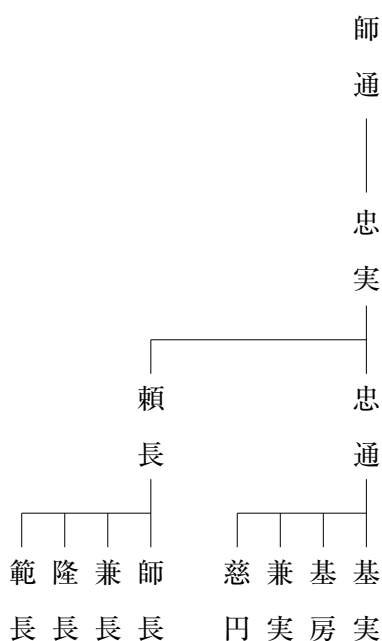
日記などひろくたづねさせ給ひ、事おこなはせ給ふことも、古き事を、こし、上達部の著座とかし給はぬをも、みな催しつけなどして、おほやけわたくしにつけて、何事もいみじくきびしき人にぞをはせし。道にあふ人、きびしく恥がましき事多く聞えき。公事に行ひ給ふにつけて、をそく参る人、障り申すなどをば、家焼きこぼちなどせられけり。

とあり、頼長は、公事に遅参したり障りを申したりする人に対しては、家を焼いたり毀したりするほど厳しい人間であったと語られている。こ

の『今鏡』の叙述からすれば、『宇治拾遺』第七二話にあるように物忌を理由に参上を一度は断りながらも「恐れながら参る」という以長の行動は、致し方のないことであつたと想像される。その一方で、主従関係にありながら意趣返しを可能にしたのは、以長と頼長との関係に何らかの理由があつたとも考えられる。そこで、『台記』にある以長に関する叙述を中心に見ていくことで、以長と頼長との関係について考察する。

『宇治拾遺』第九九話は、以長が頼長の前駆を勤めたときの説話であるが、後掲の年譜からも明らかのように、以長は頼長をはじめ、頼長の子息たちにも仕えていた。また、忠通・頼長兄弟が争つた保元の乱（一一五六）以後は、忠通の子息である基実の前駆を勤めたり、兼実の元服にも勤仕したりしていることから、頼長の側近に仕えてはいたものの先掲の藤原盛意のように政争との関わりは薄かつたものと推察される。また、『台記』保延二年十二月九日条には、「今日予前駆（中略）橘以長（大殿下勾當<sup>18</sup>）」とあり、以長は「大殿下」すなわち頼長の父である忠実にも仕えていた。以長の祖父以綱や父広房は、頼長の祖父師通の

### 【頼長周辺系図】



『後二条師通記』や忠実の『殿暦』にもその名が多く見られ、このことから院政期において橘氏の長者は代々摂関家の家司としての役割を担っていたと理解できる。<sup>19</sup>それは、橘氏の是定をめぐる問題とも関わりがある。是定については『平安時代史事典』に、

本来は橘氏長者をいい、氏人の爵に推挙すべき人を是とし定めるという意味を持つ。橘氏出身の納言参議の者がこれに当たったが、永観元年（九八三）十一月以降橘氏で参議以上になる者がなかったため、橘氏の氏院である学館院の別当職と氏挙を行う者が別になり、前者は橘氏の棟梁が、後者は橘氏と血縁ある他氏の公卿となり、それを橘氏は是定といった。藤原氏では九条流の者がこの任に当たり、源氏・王氏の棟梁も是定を務めた。

とあるが、摂関家が橘氏の是定を担うことによって、摂関家と橘氏長者との結びつきを必然的に強いものとしていったと考えられる。『台記』久安三年（一一四七）三月三十日条には、「昨日、橘氏は定宣旨下了（昨日、橘氏は定の宣旨下し了んぬ。）」とあり、頼長は保元の乱によって没するまで、この是定の地位に就いていた。また、以長も同日是定の件で頼長のもとを訪れており、その直後の四月十七日に頼長の奏請によって以長は橘氏の氏院である学館院別当の職についている。<sup>20</sup>さらに五月十八日には、頼長が学館院や橘氏の氏神である梅宮について法皇に密奏して裁許を請うており、頼長が是定として橘氏に強く関与していたことが窺える。ただ、当時の学館院については、『台記』久安三年（一一四七）七月七日条に、

遣侍為経、貞宗等朝臣於学館院。密々令見地形、還来曰、皆以耕田、但築垣纔残

（侍為経、貞宗等朝臣を学館院に遣る。密々地形を見せしむ。還り来て曰はく、皆以て耕田なり。但だ築垣のみ纔かに残る。）

とあつて、当時すでに学館院は氏院としての機能を失っていたようである。頼長は、『今鏡』に「古き事を、こし」とあつたように古儀の再興にも熱心であつたことが知られているが、同年十月十日には早速、学館院の本造始を行ったことが『台記』に記されていることから、学館院の再興も頼長の志向した古儀再興の一環として積極的に取り組まれたと理解できよう。こうした政治課題の共有が以長と頼長の距離を近くした一つの要因であつたことは想像に難くない。

さらには、頼長と以長の結び付きを語るものとして『台記』久安二年（一一四六）正月十五日条には、次のような逸話がある。

於南所替沓之間、俄欲小便無其所、前驅以長自懷取出大費献之、不堪感、帰宅後賜紅單、

（南所に於いて沓を替ふるの間、俄に小便を欲せども其の所無し。前驅以長懷より大費を取り出だし之を献ず。感に堪えず、帰宅の後紅單を賜ふ。）

頼長は南所において小便を催したが、用を足す場所がなかった。そこで前驅として扈從していた以長が「大費」を懷から取り出し、頼長に献じた。このことに感激した頼長は帰宅後、以長に紅の単を与えたというのである。「大費」が具体的にどのようなものであつたかは不明であるが、おそらくは、とつさに小便のできるような入れ物であつたと推察され

る。以長の機転のきいた行動とそれに感動する頼長という構図は、説話的なものを感じさせるが、この逸話は以長の忠臣としての側面が叙述されており、『宇治拾遺』の以長とは違う一面が映し出されている。野本東生は、『宇治拾遺』第七二話と第九九話の共通点を

以長が頼長の非をいささか大げさな演じ方で主張する箇所、主人頼長との馴れ合いに生じる我の強さであろう。<sup>(21)</sup>

としているが、『宇治拾遺』の語る以長像に『台記』の以長像を重ね合わせると、『宇治拾遺』にある以長の「大げさな演じ方」がより強調される。ゆえに、『宇治拾遺』に語られる以長の行動は、作為的かつ「猿楽」にも通ずる能芸性を帯びた振る舞いとして捉えられ、権威や秩序を逸脱した〈場〉を創出することに成功しているのである。<sup>(22)</sup>

## 五 おわりに

ここまで、『宇治拾遺』第七二話・第九九話に登場する橘以長に着目してきた。以長については、これまであまり詳しく考察されることはなかった。しかし、藤原頼長の日記『台記』や平信範の日記『兵範記』には、摂関家の家司としての活動の様子が窺える叙述が散見された。その中でも注目すべきは、藤原頼長を橘氏の是定と仰ぎ、頼長とともに当時すでに廃れていた学館院の再建を企図していたことである。最終的に再建に至ったのかは不明であるが、以長は家司として頼長の政治的な指向を支えつつ、自らの基盤をも確かなものとしようとしていたと考えられる。

また、以長周辺にも目を向けてみると、以長の父広房は文章得業生で大江匡房の養子となってその娘を娶ったが、匡房の没年である天永二年（一一二二）に本姓の橋に還っている。このあたりの事情は詳らかではないが、広房の父である以綱には広房以外の男子が見られないので、氏長者の継承が関係しているのかもしれない。いずれにせよ院政期を代表する学者である匡房の学問の影響が、広房を経由して以長に及んだとしても不思議ではなく、学問上のことについても以長は頼長と共有できる部分があったのではないか。<sup>(23)</sup>一方、以長の子息に目をやると、以長から氏長者を継承した以政にまつわる説話が『古今著聞集』<sup>(24)</sup>神祇篇にある。

前摂津守橋以政朝臣、わかくより賀茂につかうまつりけるに、四品の望につかれて、思ひあまりて申文を書きて、御戸開の夜まいりて、何となき願書の由にて、社司をかたらひて御宝殿にこめてけり。御戸さしまいらせて後、四品の所望かなはねば、大明神の御計らひにまかせまいらせんとて、申文をこめつるなりと披露しければ、社司・氏人等、当社の御ふかくに成りぬべしとて、神主以下一日に百度をなんしける。はたして四品ゆるされにけり。

以政は四位に叙されることを強く望み、社司を騙って宝殿に申文を籠める。しかし、四位になることは叶わず、申文を籠めたことを暴露する。それを知った社司たちは賀茂社の面目に関わることで、百度の祈願を行った。その結果、以政は四位に就くことができたというのである。本話では、四位になることができた後の以政の心情は一切語られないが、橋氏の長者たる以政の位階に対する思いは、以長の学館院再興の思いと同質のものであったとも考えられよう。

翻って、本稿で取り上げた『宇治拾遺』の以長説話について考えたとき、以長の振る舞いには能芸性があることを再度確認しておきたい。それは『宇治拾遺』の語りの〈場〉や編者の問題とも絡み合う。新聞水緒は、『宇治拾遺』にある忠通や頼長の描写を検討した上で、

『宇治拾遺』の編者は、忠通にごく近い所ですべてを見ていながら、摂関家内部の政治的抗争についても、中心人物の忠通本人についても何も語ろうとしない。（中略）忠通と頼長という宿命の兄弟をめぐる説話の語り方から見た時、編者は摂関家に近い所にいながらなかかつ政治構想の埒外に身をおくことのできる人物——出家者ではなかったかと考えている。

と結論づけている。<sup>(26)</sup>稿者も頼長が登場する以長説話が摂関家周辺のいわゆる〈巡物語〉の場で語られた可能性が高いと考えているが、頼長に近侍していた以長が保元の乱の後、忠通の子息たちに仕えている事実を踏まえると、『宇治拾遺』編者は、必ずしも「出家者」である必要はないものと考ええる。むしろ、以長のように摂関家の近くにありながら、「政治構想の埒外に身をお」いていた人物が、それなりにいた可能性を考えると、ここで、特定の人物の名を挙げることはできないが、摂関家の家司たちの中に『宇治拾遺』編者を求めるのが穏当であると考ええる。

#### 注

- (1) 小林保治・増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』（新編日本古典文学全集／小学館／一九九六年七月）付録「関係説話表」による。
- (2) 角田文衛監修／角川書店／一九九四年四月。



- (3) 天野文雄「家司階級と説話文学——『宇治拾遺物語』の伝承圏——」（『日本文学論究』三六／一九七七年三月）
- (4) 『宇治拾遺物語』の引用は、新日本古典文学大系本による。なお、これ以降、引用文の表記は、私意で改めた箇所がある。
- (5) 伊東玉美「『宇治拾遺物語』の邸宅譚をめぐって」（『共立女子短期大学文科紀要』四一／一九九八年一月）
- (6) 『保元物語』の引用は、新編日本古典文学全集本による。
- (7) 『江談抄』（新日本古典文学大系本）二二・二七
- 又云、行成大納言、為藏人頭之時、依堅固物忌籠居里亭之間、自禁中称大切事有召。令参上時、於殿上俄心神度失。乍恐参清涼殿。主上先識気色、揚音タソアレハト被仰。即応御音称朝成。留御簾限、行成入御前免此難云々。是則行成祖父一条大将与朝成、大納言依為敵人欲凌云々。
- （また云はく、「行成大納言、藏人頭為りし時、堅固の物忌により里亭に籠居せし間、禁中より大切の事と称ひて召し有り。参上せしむる時、殿上においてにはかに心神度を失ふ。恐れながら清涼殿に参る。主上先づその気色を識り、声を揚げて、「誰そあれば」と仰せらる。すなはち御声に應じて「朝成」と称ふ。御簾の限りに留む。行成御前に入りてこの難を免かると云々。これすなはち、行成の祖父一条大将と朝成、大納言に敵人為るに依り、凌がんと欲ふなり」と云々。）
- (8) 前掲(5)論文。
- (9) 院政期の〈語り〉については、拙稿「院政期における〈語り〉の一側面——『今鏡』を中心として——」（『立教大学日本文学』第九八号／二〇〇七年七月）で触れた。
- (10) 前掲(1)解説「『宇治拾遺物語』の説話連絡表」による。
- (11) 阿部泰郎『聖者の推参——中世の声とワコなるもの——』（名古屋大学出版会／二〇〇一年一月）第三章「推参考」。
- (12) 野本東生「宇治拾遺物語 第九九話「大膳大夫以長前 驅之問事」考——古侍の路頭札——」（『東京大学国文学論集』第四号／二〇〇九年三月）
- (13) 頼長が忠実に故実について質問することについて柳川響は、『藤原頼長——「悪左府」の学問と言説——』（早稲田大学出版部／二〇一八年五月）第六章「二つの伝——源有仁と藤原忠実」において、
- 頼長は父から助言や教訓を受ける一方で、父に逆らうことができず、忠
- 実の庇護下で自らの行動に制約を受けながら政治に携わっていた。頼長にとって忠実は尊敬すべき人物であると同時に、決して抗うことができない絶対的な存在だったのである。
- と述べている。
- (14) 『富家語』の引用は新日本古典文学大系本による。
- (15) 新日本古典文学大系の脚注にも「宇治拾遺物語72、99には、以長が先例と理屈で藤原頼長をやり込めた話がある。いかにも「不審」を申しそうな人物。」とある。
- (16) 『今鏡』の引用は『今鏡本文及び総索引』（榊原邦彦ほか編／笠間書院／一九八四年十一月）による。
- (17) 頼長の公事への厳格な態度は、次の『台記』保延二年（一一三六）十月三十日条からも窺える。『台記』の引用は増補史料大成本による。
- 今日又大殿御灸治也、予雖堅固物忌参也、大殿被仰曰、物忌来条如何、予答曰、去二十八日雖被催陣定、依御灸治不参、而今日私物忌日不参御灸治ハ、軽公事テ重私事尤有恐事也、雖物忌父為破、居家去忌ニハマサリナム
- （今日又大殿御灸治なり。予堅固なる物忌と雖も参るなり。大殿仰せられて曰く、「物忌なれども来る条如何。」予答へて曰く、「去る二十八日陣定を催さると雖も、御灸治により参らず。而して今日私の物忌の日なり。御灸治に参らざるは公事を軽くして私事を重くするなり。尤も恐れ有る事なり。物忌と雖も父の為に破るは、家に居て忌去るにはまさりなむ。」）
- (18) へ内は割注を示す。忠実が「大殿」と呼称されていたことは『台記』からも理解されることだが、ここにある「大殿下」も同様に忠実のことを指すと解する。
- (19) 石田豊「『陪従清仲』考——『宇治拾遺物語』第七五話の人物考察——」（『二松學舎大学人文論叢』第六八輯／二〇〇二年一月）では、『宇治拾遺』第七五話に登場する「陪従清仲」を仁平二年（一一五二）に没した橘清仲と推定し、清仲と撰閑家との関わりをも指摘している。
- (20) 『台記』久安三年（一一四七）四月十七日条には、「以長、可為檀林寺別当之由、同可宣下、（以長を以て、檀林寺別当と為すべきの由、同じく宣下すべし）」とあって、頼長は、以長を学館院別当に加えて、檀林寺別当にも就けるべき

であるという意思を示している。檀林寺は、嵯峨天皇の皇后であった橘嘉智子が承和年間（八三四～四八）に創建したとされるが、平安時代中期にはすでに荒廃していた。その別当職を学館院別当と兼任させようとしていることから、頼長が橘氏の中興を意図していたことが理解される。

(21) 先掲(12)論文。

(22) 小峯和明は、『宇治拾遺物語の表現時空』（若草書房／一九九九年十一月）「8 古事談と十訓抄——院政期以後」において、

院政期以後の話群はたんに年代の新しさだけでなく、猿楽やパロディの面など『宇治拾遺物語』の構造にかかわる本質的な意義を担っている」と述べている。

(23) 『今鏡』ふじなみの中「かざりたち」に

堀川大納言（稿者注、藤原師頼）に、前書とか聞こゆる書、うけ伝へさせ給へりけり。その書は、匡房の中納言より伝はりて、読み伝へる人かたく侍るなるを、この殿（稿者注、頼長）ぞ、伝へさせ給へりける。

とあり、匡房が読み伝え、その後、あまり読み伝えることのなかった『前漢書』を頼長は読み伝えていたという。

(24) 以政は仁安元年（一一六六）に『橘逸勢伝』を著したとされ、そこには御霊信仰が背景にあるとされるが、『国史大辞典』では、「その作成を命じたのが誰であったかは不明であるが、橘氏は定であった藤原基房の可能性がある」としている。仁安元年（一一六六）は以長最晩年であり、以長が関わった可能性も否めない。

(25) 『古今著聞集』の引用は、日本古典文学大系本による。

(26) 新聞水緒『宇治拾遺物語』編者の位置——忠通と頼長をめぐって（『花園大学国文学論究』／一九九四年十二月）

橘以長年譜 \*【一】内は依拠資料

院政	天皇	年号	西暦	月	日	位	官	事項
鳥羽	崇徳	保延二	一一三六	十一	十六	六位		【台記】 豊明節会。頼長の前駆として伺候する。
	近衛	久安二	一一四六	正	十五			【台記】 大原野祭。頼長の前駆として伺候する。
				十二	二十五			【台記】 頼長、内大臣に任せられる。以長、参内の前駆として伺候する。
				十一	十三			【台記】 頼長、大饗を行う。以長、前駆として伺候する。
				九	十八			【台記】 頼長、慶賀を申す。以長、前駆として伺候する。
				正	十三			【台記】 頼長、直衣始。以長、前駆として伺候する。
				十一	十一	五位		【台記】 頼長が小便を催した際、懷から「大費」を取り出し頼長に献ずる。頼長は感に堪えず、帰宅の後、以長に紅単を与える。
				九	十三		藏人	【台記】 鳥羽法皇、四天王寺参詣。以長、頼長の前駆として伺候する。
				三	十四			【台記】 頼長、五節舞姫を献じる。以長、前駆として伺候する。
				三	二十八			【台記】 豊明節会。一献の瓶子を務める。
				四	三十	從五位下	散位	【台記】 藤原忠実七十賀で忠通より忠実に献ぜられた馬を牽く役を務める。
				五	二十七			【台記】 橘氏は定の件で頼長のもとを訪れる。
				五	二十八			【台記】 学館院別当に補せられる。
				九	十二			【台記】 橘清資の功課別当の件で頼長を訪れる。
				十	十六			【台記】 功課別当は指貫を着すべきか頼長に尋ねる。
				十一	二十			【台記】 梅宮の件で頼長に召される。
				正	三			【台記】 梅宮の件で頼長に召される。
				四	十三			【台記】 鳥羽法皇、四天王寺に参詣。頼長に命ぜられ各所に灯明をあげる。
				六	五			【台記】 頼長に命ぜられ、四天王寺金堂に灯明をあげる。
				八	九			【台記】 政、平座に伺候する。
				十	二十			【台記】 学館院木造始に赴く。
				十一	二			【台記】 梅宮祭に見参する。
四			一一四八	正	三			【宇槐記抄】 橘氏大夫七人で頼長を訪れ、氏爵で清仲の子、周愷を推挙する。
				四	十三			【台記】 頼長から梅宮預に基仲、権預に仲遠を任ずることを伝えられる。
				六	二十三			【台記】 頼長の子、兼長が慶を申す。以長、騎馬にて伺候する。
				八	五			【台記】 頼長、梅宮参詣。以長、前駆として伺候する。
				十	十三			【台記】 頼長の女、多子従三位に叙す。以長、頼長の参内の前駆として伺候する。
				十一	二十三			【台記】 兼長、慶を申す。以長、騎馬にて伺候する。
				十二	十三			【台記】 頼長に騎馬にて伺候する。
				十三	十			【台記】 兼長の雑色所別当に任せられる。

[illegible]

久寿元	一一五四	閏十二	二十七	兼長、慶賀を申す。以長、前驅を務める。	【兵範記】
		正	三十	師長、春日祭上卿。以長、奉行を務める。	【兵範記】
		二	二	頼長の命により春日祭で前驅の装束の色を目録として作成する。	【兵範記】
		三	三	平等院一切経会。以長、楽行事を務める。	【兵範記】
		十一	十三	師長、慶賀を申す。頼長の前驅として伺候する。	【兵範記】
二	一一五五	四	二十	頼長、賀茂詣。以長、兼長の前驅として伺候する。	【台記別記】
		六	八	頼長室、幸子御葬礼。以長、迎火の役を務める。	【兵範記】
		十	二十九	大嘗会御禊。以長、前驅として伺候する。	【兵範記】
保元元	一一五六	九	二十五	藤原基実拝賀に伺候する。	【兵範記裏書】
		十一	十三	基実を是定とする宣下状を持参する。	【兵範記】
		二	三十	御八講始。堂童子の役を務める。	【兵範記】
		八	十九	春日祭。前驅として伺候する。	【兵範記】
二	一一五七	十	八	基実、右大臣に任ぜられる。以長、前驅として伺候する。後の大饗で瓶子を務める。	【兵範記】
		十一	七	新造の大内裏に天皇遷幸。以長、宣耀殿の調度品の行事を務める。	【兵範記】
		十二	二十二	造大内裏の勸賞による叙位。	【兵範記】
		十三	七	東三条殿で行われた御神楽の奉行を務める。	【兵範記】
		十四	七	五節沙汰。童女の担当となる。	【兵範記】
		十五	十二	藤原兼実元服。高坏の役を務める。	【兵範記】
三	一一五八	正	二十九	天皇、春日行幸。基実の前驅として伺候する。	【兵範記】
		二	二十八	基実参内。前驅として伺候する。	【兵範記】
		八	十五	勸学院学生が基実の第に参賀。以長、伺候する。	【兵範記】
		九	二十三	法成寺惣社祭の奉行を務める。	【兵範記】
後白河 二条			九	基実が左獄の近衛大路側を通ったことに対して疑問を呈する。	【富家語一一八】
六条 高倉	永暦元 一一六〇				【尊卑分脈】
	嘉応元 一一六九			卒。	